

趣味活動充実のための発表の場としての アプリケーションの制作と評価

佐々木 知美 (NE19-0043C) , 橋本 綾子 (NE19-0093B) , 望月 俊男

キーワード： アプリケーション, 中高年, 生涯学習, 趣味, 地域情報化

1. 研究の背景

1.1. 生涯学習

少子高齢化や情報化社会などの時代の変化とともに、生涯学習へのニーズも多様化していると考えられる。宍戸[1]によると、これまで学習を継続してきた人々はその成果を発表したい、活かしたいのではないかとしている。また、宍戸[1]は、多くの人が他の人や自然、地域との「つながり」を求め、またその「つながり」が生きがいの重要な要素であると導き出している。

1.2. 地域情報化

丸田[2]によると、インターネットを利用した「地域情報化」の試みが進められている。ここでいう「地域情報化」とは、行政事務の電子化を指すのではなく、地域活性化のために地域の人々が主体となって地域情報の情報化を進めていく活動である。

1.3. 研究の目的

つながりの実現と地域活性化のための情報化の実現には、地域 SNS に代表されるような住民主体のコミュニティ・ネットワークを築くことが重要であると考えられる。実際に「ひよこむ」や「ごろっとやっちろ」などの地域 SNS を調査したところ、地域情報に関する情報交換は行なわれているが、生涯学習の成果発表の場としてはあまり利用されていないということが分かった。そこで、学習活動の一環である趣味に焦点を当て、その成果発表の場を提供したいと考えた。

本研究では、他者に成果物を見せることのできる趣味を持つ人たちの「発表の場」となるアプリケーションを制作し、実践的に評価する。これにより、地域で行なっている講座やサークルなどの趣味団体に参加している人々の発表の場ができ、フィードバックを得られる機会が増えることで創作意欲の向上や、さらなる目標の設定などモチベーションの向上につながることを最終目標である。

2. 「ほっとリング」の制作

2.1. プロジェクトとその目的

筆者らは 2009 年度の望月プロジェクトにおいて「趣味の輪を広げる環境を作り、アクティブシニアのライフスタイルを広げよう！」というテーマのもと、高齢者たちが趣味の成果のデジタルな記録帳をつくり、ネットワークを介して共有することのできる「ほっとリング」というデスクトップアプリケーションを制作した。このプロジェクトを進めるにあたって中野島にある「新多摩川ハイム PC クラブ」と、川崎市多摩老人福祉センターの「絵手紙講座」にご協力をいただいた。ご協力いただいた団体において女性の参加率が高かったこと、編み物や料理など自宅に居ながら 1 人で趣味活動を行なうことが多い女性の時間を有効に活用したいと考えたことから、対象とするユーザーはアクティブシニアのうち趣味を持つ 60 歳から 70 歳の女性とし、講座やサークルといった顔見知りのグループで利用するというシナリオを立てた。

2.2. 卒業制作への課題

制作したアプリケーションを学内外の発表会において試用してもらった。しかし機能面において未完成的な部分が多々あり、「今後改良して、実用できるようにしてほしい」という意見を多くいただいた。そこで、実用可能なアプリケーションを制作することが卒業制作への課題であった。

3. 「RecoBook」の制作

3.1. RecoBook制作の目的

本研究で制作したアプリケーションは、「ほっとリング」と趣旨を変えず、仲間内で趣味活動を写真と文章で記録・共有できる記録帳とした。ターゲットユーザーを中高年層にも広げ、操作手順の明確化、インターフェースの修正、未実装機能の実装を行ない、より多くの人に利用してもらえるアプリケーションを目指した (図 1)。



図 1 RecoBook のトップ画面

3.2. RecoBookの機能

RecoBook の機能は、以下の 5 項目にまとめられる。

(1) 記録帳にページを追加する

新しく趣味の成果のページを作り、そこに載せる写真の向きと枚数を指定したあと、項目に沿って趣味活動の記録を書き込むことで、ページの作成が完了する(図 2)。



図 2 ページの作成画面

(2) 記録帳を読む

記録帳を開き、ページの右下もしくは右上をクリックすると、ページめくりの動作とともに次のページへと移動し、記録帳を読み進めることができる(図 3)。



図 3 記録帳を読む画面

(3) 新しい記録帳をつくる

記録帳は 1 アカウントにつき 4 冊まで作ることができる。新しい表紙を設定することで記録帳を増やすことができる(図 4)。



図 4 記録帳の作成画面

(4) ページを削除する

削除したいページを選択し、「ページを削除する」ボタンを押すことで簡単にページを消すことができる(図 5)。



図 5 ページの削除画面

(5) メッセージボード

ログインして最初に見える画面の右側に、ユーザー間でメッセージのやり取りができる掲示板を設置した。自由に記述することができるので、メンバーに本の更新情報を伝えたり、人の本を読んだ感想を共有するために利用する。

3.3. ユーザインタフェース

古賀[3]はインタフェースの使いにくさはユーザーに不要なストレスや無意識のストレスを感じさせるという。色と配色，レイアウト，形，配置，操作方法，フィードバックの方法を考慮することで人が認知しやすいもの、すなわち人に優しいインタフェースを作ることができるという。

たとえば、寒色系の色は心理的に落ち着くことができる。そこで、ページや本の作成といった作業の際には水色を基調とすることとした。また、ページの削除やアプリの終了などといった重要な処理の際は、赤という興奮色を用いることでその動作を本に行なって良いのか一度立ち止まって考えられるようにした。さらに、無意識の操作の対応として、画面が移動する際にはアラートをつけ、水色の情報アイコン，黄色の確認アイコン，赤色の警告アイコンといった3パターンアイコンを利用した確認メッセージを付与した。



図 6 アラートのメッセージ例

4. 「RecoBook」の評価と改善

4.1. ユーザーテストから実践評価までの流れ

RecoBook は改良を繰り返しながらより良いものになるように制作してきた。以下にその流れを示す。

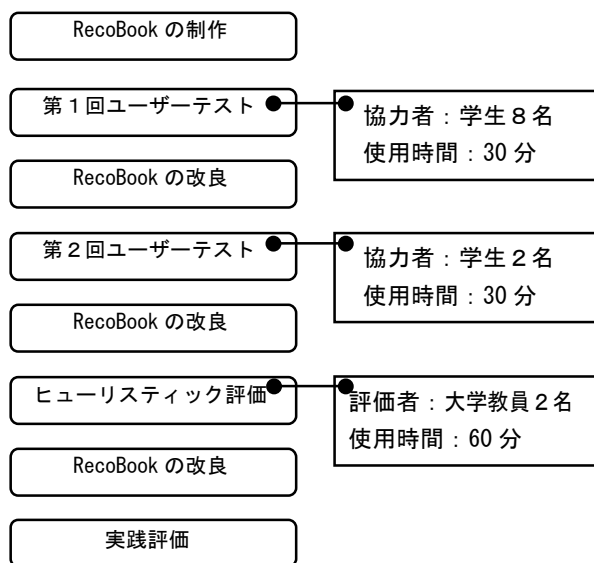


図 7 実装評価までの流れ

4.2. RecoBookの改善

ヒューリスティック評価の結果から分かった問題点のうち、特に重要であるものを抽出し、その改善方針を立てた(表 1)。なお日程の都合上、ヒューリスティック評価でいただいた意見の中からバグに関するものを中心として改善した RecoBook を実践評価で使用した。これらの改善方針は、今後の RecoBook アップデートの際に取り入れる。

表 1 問題点と改善方針

問題点	改善方針
ページを書く際、現在どのステップなのか分からない	現在どのステップにいるのかを明確にする
フィードバックの方法が適切でない部分が多い	ボタンの状態やアラートの文章などのフィードバックを明確にする
本のクリックが分かりづらい	本全体を開くように改善する

5. 「RecoBook」の実践と評価

5.1. 目的

ユーザーテストとヒューリスティック評価を通して改良を行なった RecoBook を、複数のユーザーに約 1 ヶ月に渡って利用してもらった。これにより、今までのユーザーテストやヒューリスティック評価では検証できなかった長期的な視点からの RecoBook の有効性について検証することが目的である。

5.2. 実践の概要

(1) 協力先

想定していた協力先は、同じ趣味をもつ講座やサークルなどの団体であったが、今回は新多摩川ハイムのような趣味団体に参加している 18 名の中高年に協力を依頼した。参加者は絵手紙や折り紙など様々な趣味を持っており、ほとんどの人が顔見知りである。パソコンの使用レベルは初心者から上級者まで様々である。

(2) 手順

RecoBook のインストールと使用方法について手順書を渡し、個人のパソコンにインストールしてもらった。その後、約 1 ヶ月(12月14日～1月10日)自宅で使用してもらった。自宅にパソコンが無い参加者は PC クラブの共有パソコンで RecoBook を使用してもらうこととした。使用期間終了後は、紙媒体によるアンケートへの記入をもらい、その結果とアクセスログを用いて評価した。

5.3. 結果

(1) アンケート結果

1. 択一式質問の集計結果.

仲間同士で趣味の記録を見せ合うことに魅力を感じ、RecoBook が会話のきっかけになった人は 75% だった。他のユーザーの RecoBook を読むことで趣味活動の意欲や技術が向上した人は 34% であった。RecoBook で「記録に残す」ことで趣味活動に変化があった人は 33% であった。RecoBook を今後使い続けたいと答えたユーザーは 49% であった。

2. 自由記述の結果の一部を以下に示す.

- ・多くのジャンルの作品に触れ、新しい趣味への関心が深まった
- ・趣味は異なってもお互いに話し合ったり親しくなるきっかけづくりに役立つ
- ・自己の作品が他人の目に触れることから、一層の技量に努めたいと思った
- ・他の人の趣味は理解出来るようにはなっても、自分の趣味とは別のもので自分が新たに取り入れる気持ちは分からない

(2) アクセスログの結果

ユーザーがどのように RecoBook を利用したのかを知るため、ログイン回数とログイン日数、他のユーザーの記録帳を開いた回数の平均、最大、最小、標準偏差を計算した(表 2)。この結果から、一番多く利用したユーザーと、利用しなかったユーザーの差が大きいことが分かった。またログイン日数に対してログイン回数の平均が多いことから、一日に何度もログインしていたユーザーがいることが分かった。

表 2 アクセスログ集計結果

	ログイン回数	ログイン日数	他の人の記録帳を開いた回数
平均	13.11	5.52	22.94
最大	45	18	84
最小	1	1	0
標準偏差	12.59	5.73	26.23

5.4. 考察

他者と趣味を見せ合うことが意欲の向上に繋がる人や、自分の趣味が他者に見られることで一層の技術向上に努めようと感じる人に RecoBook は向いていると考えられる。また、今回は趣味が違うグループによる実践だったからこそ、RecoBook によって新たな趣味理解や仲間とのつながりを作るきっかけになることが分かった。

6. まとめ

6.1. 本研究の結論

本研究では趣味活動の記録と共有を通して、趣味の発表の場を増やし、趣味活動を充実させるためのアプリケーションとして RecoBook を制作した。アプリケーションの度重なる改良を行ない、実践的に評価した結果、RecoBook は趣味活動の発表の場として十分機能することが分かった。また、実践では大きな問題もなく、利用できたことから RecoBook を実利用可能なアプリケーションにするという目標は達成できたと考えている。

6.2. 本研究の課題と今後の展望

実践の参加者が仲間同士で趣味の活動の記録を見せ合えることに魅力を感じている一方で、RecoBook を使い続けたいという人は半数にとどまった。アクセスログの結果から、頻繁にログインしている人と一度きりで終わってしまった人との差が大きいこと。また、パソコンの苦手な人の記録帳の作成を、得意な人が代わりに作成していた状況から、パソコンをあまり利用しない参加者が多くいたことが要因であると考えられる。パソコンをあまり利用しない人にも利用し続けたいと思わせる魅力をどう出すかが今後の課題である。これからも実践評価での協力先の皆さんには RecoBook の利用を続けてもらう予定なので、課題を解決し、長期間使い続けてもらえるアプリケーションにしていきたい。

7. 謝辞

本研究は、多方面の方々のご協力により進めさせていただくことができました。

ユーザー評価にご協力頂いた美術研究会のみなさま、CD コースの学生のみなさま、ヒューリスティック評価にご協力いただいた上平崇仁准教授、栗芝正臣准教授、専修大学企画課の中山力課長、宮澤小野花主任、多摩市民館館長夏井美幸様、そして長期間の実践評価にご協力くださった新多摩川ハイム PC クラブのみなさまに深く感謝いたします。

参考文献

- [1] 宍戸佳子 2009 生涯学習と生きがい。余暇学研究、第 12 号、pp.15-25
- [2] 丸田一 2007 ウェブが作る新しい郷土地域情報化のすすめ。講談社、東京
- [3] 古賀直樹 2010 UI デザインの基礎知識、技術評論社、東京